

こんにちは!

村立東海病院



大人になれば治る？ 小児の気管支ぜんそく

秋は過ごしやすい季節ですが、その反面、一年でもっともぜんそく発作が多い季節でもあります。

皆さんは、小児の気管支ぜんそくは、大人になれば治る病気だと思いますか？ どれが正解でしょうか？

①大人になるまでに治る ②治らずに大人に持ち越すことも多い ③まれにぜん息で死に至ることもある

実は、どれも正解です。50～70%は大人になるまでに軽快しますが、残りの患者は大人になっても症状がそのまま続くか、もしくは再発することがあります。0～19歳でぜんそくで死亡した患者は、1990年には167人でしたが、2012年には6人と大幅に減らすことができました。これには、吸入ステロイド薬の使用、ガイドラインの制定や、ぜんそくに対する知識の普及が進んだことが大きく貢献していると考えられています。しかし、ぜんそくの発症早期や軽症患者でも突然の重症発作により死亡することもあり、十分な注意が必要です。

●発作がなくても油断は禁物●

ぜんそくの治療が大きく改善したのは、ぜんそくのメカニズムなどについての新しい知見が集積し、抗ぜんそく薬の使い方が格段に進歩したことによるとされています。

以前は、ぜんそく発作が治まれば健常人と変わらない気管支に戻ると考えられていました。ところが、実際には、発作が治まっても気管支では慢性の炎症が持続し、ますます敏感になって発作が起こりやすくなり、発作を繰り返すという悪循環に陥ります。やがて気管支には元に戻らないという変化が起こり、肺機能も低下してしまうことが明らかになってきました。

この悪循環を断つために、発作が起きていないときに気管支の炎症を抑えるための治療をすることこそ治療の鍵だということが分かってきました。

●より良い治療の進め方●

なるべく早期にぜんそくの診断をして治療を開始します。小児のぜんそくの80%以上は、家ほこりや動物のふけ、花粉、真菌などが原因となっているので、検査で確認し、除去に努め、アレルギーによる炎症を予防することが治療の第一歩となります。発作が起きたときは、発作治療薬を用いてなるべく早く対応し、軽いうちに治すよう心掛け、主治医と治療計画を立てておきます。



発作がないときこそが治療の本番です。抗炎症薬(炎症を抑えるのもっとも有効で副作用の少ない吸入ステロイド薬など)を中心とした長期管理薬で慢性炎症を抑え、発作のシーズンや運動時でも発作が起こらない状態を維持できるよう根気よく治療を続けます。最終的には肺機能の正常化を目指します。

治療薬が少なすぎても多すぎても良くありません。毎日の発作や咳の状態を細かく記録しておき、これを見ながら個々の患者さんに合わせた薬の調整をします。小学2～3年生以上になれば肺機能検査ができるようになるので、これも治療の参考にします。発作がない状態が長く続けば続くほど気管支が正常化することが期待できます。

●ぜんそくと向き合い方●

有効な治療法がなかった時代、薬をなるべく使わないで根性で治すことが強いられたり、発作により、日常生活の制限を余儀なくされたりする辛い時代があり、ぜんそくで死亡することもまれではありませんでした。しかし最近では、ぜんそくでもきちんと治療を続けることで健常児と変わらない生活を送ることが可能となり、スポーツ選手の中には、治療を続けながらもオリンピックやプロサッカーチームなどで活躍している選手も少なくありません。発作の有り無しにかかわらず、きちんとぜんそくと向き合い早期の完治を目指しましょう。

村立東海病院 小児科 松井猛彦

【問い合わせ】村立東海病院(☎282-2188)、保健年金課地域医療担当(☎287-0899)